

算命学中庸

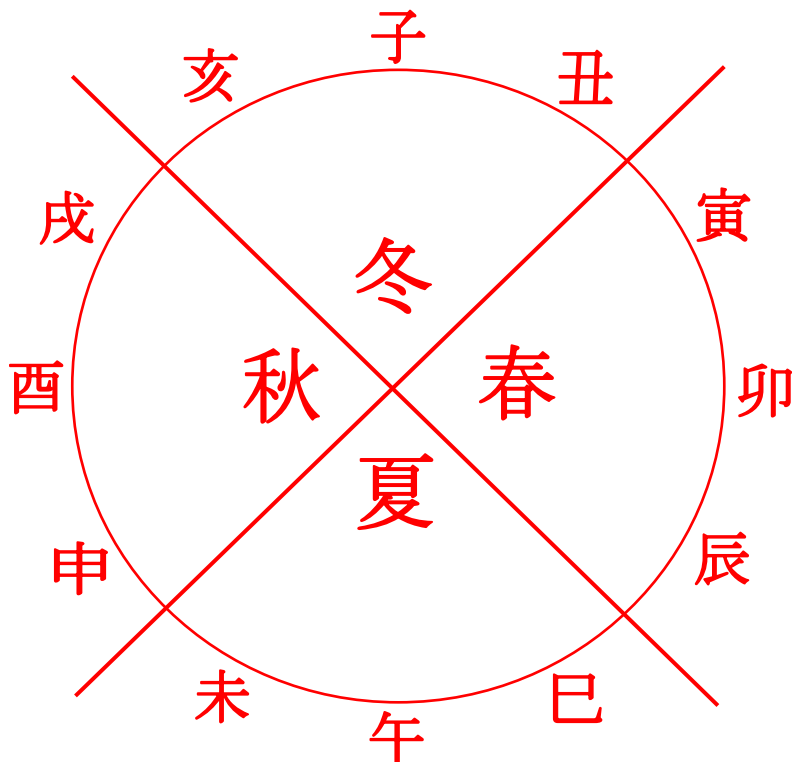
【初年】 8 回目

8 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【十二支と陰陽論 おんようろん】

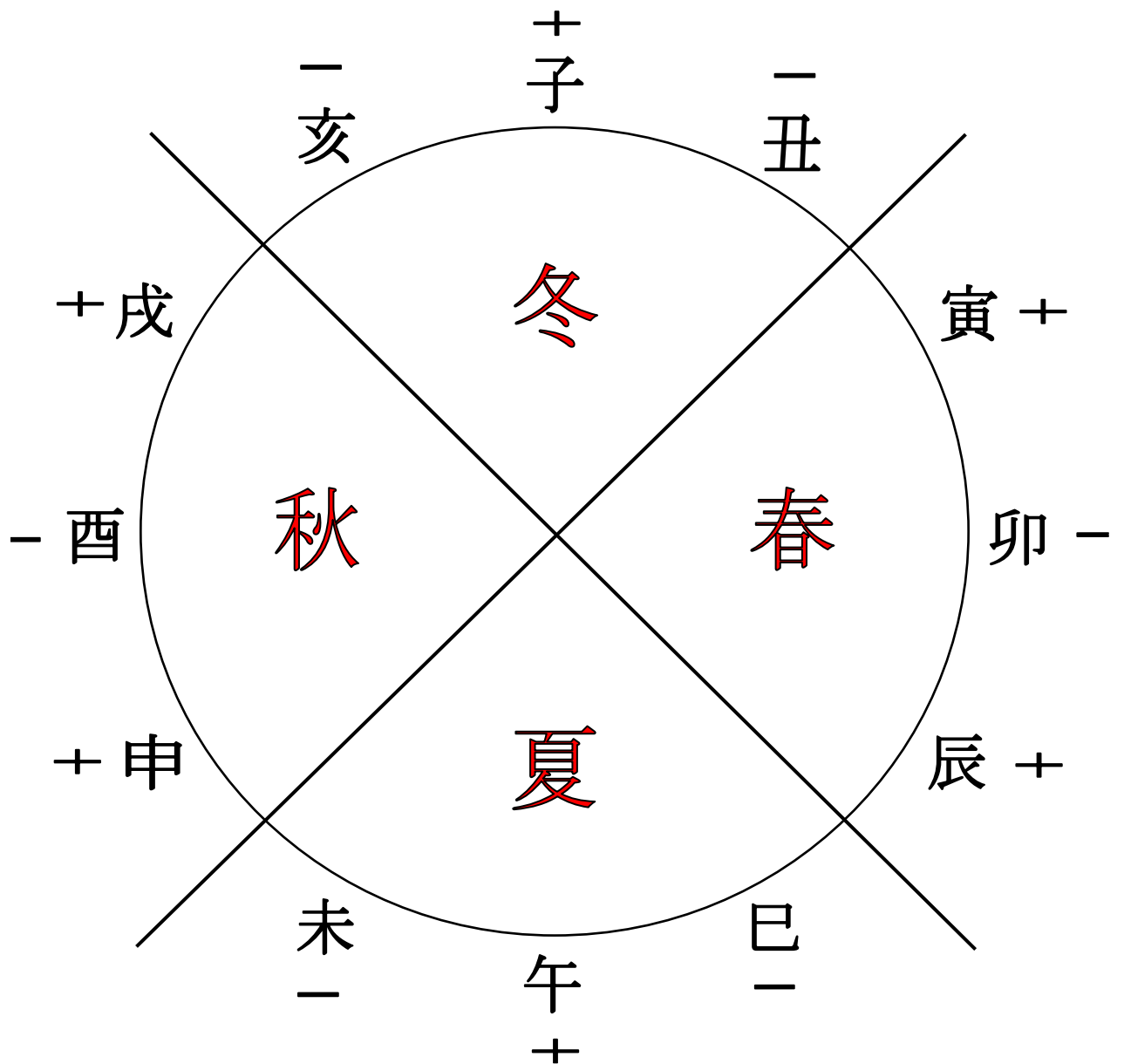
・【初年】 8 回目 【十二支と陰陽論】 01

【十二支と季節】 図A



図A 十二支盤には、春 夏 秋 冬の季節と十二支が配置されています。

【十二支と陰陽】 図B



図B じゅにしばん 十二支盤 には、季節と十二支、そして、陰陽が配置されています。

まずは 図A 【季節と十二支】 を見てください。

つぎに 図B 【十二支と陰陽】 を見てください。

円盤に十二支を描くと **図A** のように大きく 4 つの境界に分けられています。

（亥子丑）は（冬の十二支）です。

（寅卯辰）は（春の十二支）です。

（巳午未）は（夏の十二支）です。

（申酉戌）は（秋の十二支）です。

十二支は〔春 夏 秋 冬〕を 4 区分した境界が^{もと}基になっています。十二支は春・夏・秋・冬に分けることができます。このことは実際に占いをするとき重要になります。

図A とおなじように **図B** にも、季節と十二支が書かれていますけど、**図B** には^{ほそく}補足して、それぞれの十二支に陰（－）と 陽（＋）が書き加えられています。

十二支にも、陰陽があるということを、図に描いて^{しめ}示したのが **図B** の十二支盤です。

図A と 図B は〔春 夏 秋 冬〕の季節と十二支が書かれています。図B の場合は、各十二支がもつ（陰・陽）の意味合いとして…… 陰（－）と 陽（＋）が書き加えられています。

十二支にも（陰・陽）があるということを、図に描いて示したのが、図A と 図B です。

図B の十二支盤を見ると、十二支のそれぞれに（＋）と（－）の記号がついています。

子（＋）を始めとして、子の場所から、陽と陰が交互に並びますから、（子）のつぎは（丑）で（－）になり、寅が（＋）です。

（寅）以下は順番に － ＋ － ＋ というように交互に並びます。

このように、十二支にも陰陽と五行があるのです。

🔪 図A と 図B を参考にして、十二支盤を書く練習をしてください。

① ご自分でノートに丸い円形  を書いて、それに季節を書き入れてください。

② 十二支を書き加えて、十二支盤を作ってください。

③ それぞれの十二支に、陰陽を書き加えてください。

☞ 円盤に十二支を書くときは、（子）を一番上にして、（午）が一番下に来るように書きます。そして、向かって右側は（卯）、左側には（酉）が来ます。

これら 4 つの（十二支）を先に書くと、書きやすいと思います。

十二支（子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥）は、円盤を一周すると 1 年です。

十二支は一周して終りではありません。一年が終わると、またつぎの新たな一年がはじまる時間の流れといえます。

そして、長く続いて行くものは、必ず「陰と陽が交互^{こうご}に並ぶ」という、陰陽の法則がありましたように、十二支も永遠に続いて行く時間の流れです。それゆえに、十二支も陽と陰が交互に並ぶと考えます。 十二支も（陰）と（陽）が交互に並ぶ

⇒ 十二支の（陰）と（陽）は、むずかしくないですよ。

最初の（子）が＋です。

最初の（子）を＋としたのは、暦^{こよみ}のうえでは（冬至）に相当するところです。昼が一番短い日の冬至の場所です。昼が一番短い日というのは、〔日照時間がそれ以上は短くならない日〕という意味になります。

そして、冬至の日を境にして、日照時間が伸び始めます。冬至の日から、太陽が地上を照らす時間が伸び始めるので、ここから陽の気が出始めるとしたのです。

〔生命力が復活する節目ふしめという意味もあります〕

それで最初の十二支（子）を（＋）にしたり、十二支を言葉でいうときは、必ず、子ね 丑うし 寅とら 辰たつ……というように（子）からはじめます。

冬至から日（日照時間）が伸びはじめて——自然界の活気がここから始まる。と考えているからです。

図B を見てわかるように、最初は（子）が（＋）です。あとは（丑）から、陰と陽が交互に並ぶわけですから、つぎの丑は－です。そして、つぎの寅が＋で、以下順番に－＋－＋と並びます。これが十二支の陰陽です。

⇒ 十二支には〔木火土金水〕の五行も決まっています。算命学には自然界は五行で成り立っているという考え方があり、自然界には五行が存在するとしています。

1 年間という期間《春夏秋冬》をあてはめて、自然界のようそう様相は眺めると、春と夏では異なる姿に変わります。

秋から冬になれば、また季節の有り様^{あ よう}が変化します。

季節が移りゆく毎^{うつ}に、自然の姿そのものが変わって行きます。

なぜ！ 春・夏・秋・冬の季節が移り変わるたびに、自然の景観も変化するのだろうか……それは春夏秋冬の季節が巡る毎^{めぐ}に〔木火土金水〕の強弱が変化するためではないだろうか、このような考えに行き着^いいたのです。

〔たとえば〕五行で木性といえ、ものにたとえると、樹木とか草花を想像していただければよいのです。

自然界には、なにかしらの木性が一年中存在していますから、いずれの季節でも、樹木・草花を目にすることができます。

ところが「木性の気」がつねに一定の強さで存在しているのではなく、木性の気が強くなる季節もあれば、木性の気が弱くなる季節もあるのでは、というふうに古代の人は想定したのです。

火性を〔例にとれば〕自然界のなかで火性の代表は太陽です。太陽は一年中存在していますが、常におなじ強さで輝くわけではなくて、春・夏・秋・冬の季節が変わるたびに

太陽の輝きと放射熱が強くなる時期もあれば、弱くなる時期もあるのではないか……それはどうしてなのかという疑問が生じたのです。

（木火土金水）という五行は一年中存在しているけど、季節によっては、強くなったり、弱くなったりしている。それゆえ、自然界の姿が春・夏・秋・冬で移り変わって行くように見えるのではないだろうか……というような考え方をしたのです。

季節が変わるごとに五行の強弱も変化する

📖 ご一緒に考えていただきたいのですが……。

五行（木 火 土 金 水）

まずは、五行のなかの火性から考えてみます。

自然界における火性の代表は、熱を放射する太陽です。

太陽は一年中存在していますが、一年のなかで特に火性のチカラが強くなる季節といえば夏です。

木 **火** 土 金 水 夏は1年で一番火性が強くなる季節

夏

夏になると、太陽の陽射しも強くなり、暑くなります。

一年で一番火性のチカラが強くなる季節は夏です。

図A 図B をみるとわかるように、(巳) と (午) は夏の十二支です。

(巳) と (午) は火性の十二支であり、火性のチカラが強い十二支である。と決めたわけです。

※ (未) も夏ですが、未土^{ひつじど}についてはあとで説明します。

⇒ 冬が来ると寒くなります。

最も寒い季節になるのは、五行のどれが強くなるのかといえば、それは水性です。

木 火 土 金 水

冬

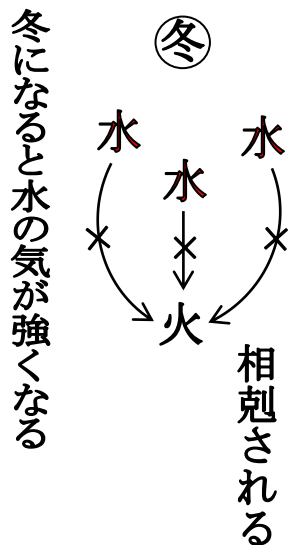
冬は水性^{すいせい}のチカラが強くなる……そのために寒くなると考えて、冬の十二支^い (亥) と ^ね (子) を、水の十二支だと決めたのです。ゆえに^{いすい} (亥水) ^{ねすい} (子水) と呼称します。

※ (丑) も冬ですけど、丑土^{うしど}についてもあとで説明します。

夏になると火性「火気」^{かき}が強くなるから暑くなる
冬になると水性「水気」^{すいき}が強くなるから寒くなる } というのは

【初結】 6 回目【気について】の授業で、気について勉強しましたが、実際に太陽が強くなる、弱くなる、とかも関係ありますが、その

基^{もと}になっているのは、自然界に「火性の気」「水性の気」が存在するためであり、冬が来ると「水気」のチカラが強くなるから、寒くなると結論づけたのです。



冬になると、水が強くなります。

水が強くなると(水→×火)と、水が火を消してしまいます。

水が強くなると(水剋火)(水剋火)(水剋火)と火が相剋されて、火性のチカラが弱まります。

夏になると、火^か気のチカラが強くなって暑くなりますが、冬になると水^{すい}気のチカラが強くなって寒くなるのではないかと考えたのです。

☞ そうしますと、五行のはじめ、木性はどうでしょう。

春が来ると、自然界の草木や樹木は芽吹^{めぶ}いてきます。

冬のあいだは少なかった緑^{りよくよう}葉が、春の訪れが来るとともに、自然界は急速に若葉の緑に衣替えをします。

春は木^も気が強くなる季節ではないかと考えたわけです。

それゆえに、春の十二支である（寅）と（卯）は木性のチカラが強い十二支のはずであると決めたのです。

① 木 火 土 金 水

春

※（辰）も夏ですが、^{たつど}辰土についてはあとで説明します。

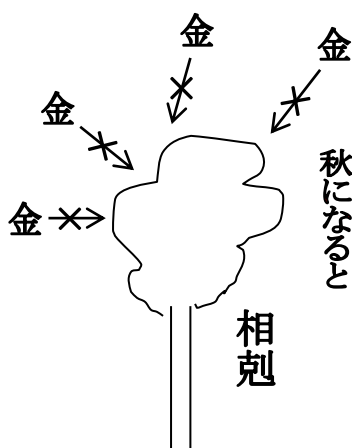
夏は火性のチカラが強く、冬は水性が強い、春は木性が強くなります。もうひとつ秋が残っています。

秋に起こる自然界の代表的な現象は、緑が急に衰える姿です。十二支盤で春の反対に位置する秋の季節がやってくると緑が失われます。樹木の枝葉は赤や黄色に変化して、あたかも枯れたような姿になっていきます。

木 火 土 ② 金 水

秋

秋の季節にチカラが強くなるのは金性です。



秋もさきほどの冬の話とおなじです。

樹木が立っているとします。

秋になると、目には見えませんが、

自然界のなかで金性のチカラが強くなると

考えたのです。

自然界全体に金性のチカラが^{ただよ}漂いはじめて、だんだんと^{きんき}金気が強くなり（金剋木）（金→×木）（金剋木）と、金性は木性を相剋します。金性が木性をやっつけてしまう姿です。

金性の気そのものが強くなった「気の姿」を、眼で捉えることはできませんが、秋になると樹木は葉を落としてあたかも枯れたようになってしまいます。

それは金性のチカラが強くなって、樹木のチカラが衰えるためではないか……というふうに考えて、秋の十二支の（申）（酉）は金性のチカラが強い十二支だと結論づけたわけです。

⇒ 最後に土性だけが残りました。

木 火 **土** 金 水

五行（木火土金水）のなかで、土性は特別な存在であるという考え方があります。

土性は五行の中心である

土性というのは、自然界では^{つち}土ですから、地面そのものでもあるのです。

“木が生えている”といっても、地の中に根を張って、幹と枝葉は土の上に生えているわけです。

“川が流れている、水が流れている”といっても、地面の上を水が流れているわけです。

あるいは、金性をものにたとえば、鉱物とか岩石ですが、岩があるとか、鉱物があるといっても、結局は地面の上に乗っかっているのか、地面の下に存在しているのか、そのような姿です。

また“火が燃えている”といっても、これも土の上で火が燃えているわけです。

夏になると太陽のチカラが強くなって暑くなります。

それは太陽光線が地面に放射して、陽射しが地面に当たるために自然界全体が暖かくなるわけです。

太陽の放射熱が強くなっても、地面がなければ、気温は上がらないはずです。

宇宙空間のように、ただ光が素通りするだけでは、気温は上昇しないわけです。

気温が上昇するには、そこに日光を受け止める地面、つまり、土性があるから気温も上がります。

そうしますと、自然界には、木性が存在している、火性が存在している、金性も存在している、水性も存在している——といっても、それは土性を中心にして、すべてが存在しているのではないか、という考えに行き着いたわけです。

そこで（木火土金水）の五行は、土性を中心に、地面を中心にしてまとまっている。という捉え方^{とら}をしています。
自然界は土性を中心にまとまっている

五行は土性を中心にしてまとまっている姿をしている。
それゆえに、木 火 土 金・水 の真ん中に 土性 が来るように配置されているのです。

⇒ 土性には、ほかの四性^{よんせい}（木性）（火性）（金性）（水性）をまとめるチカラ・調節する役目があると考えています。
つぎの季節〔たとえば〕春から夏を迎えるための調整役、まとめ役を土性がしなければならない……という結論に
^{いた}至り、この考え方を十二支に当てはめて、土性を各季節の最後のところに配置しました。

そのことは十二支盤を見ると理解できます。

図A あるいは 図B を見てください……。

十二支盤の北方《冬の領域》に位置する（丑）であれば、（丑）の前に位置している（子）は水の十二支です。

（丑）のつぎに位置している（寅）と（卯）は、木性の十二支で東方《春の領域》に位置しています。

北《冬の領域》3つの十二支（亥^い子^ね丑^{うし}）の（丑^{うし}土^ど）のところにあ
る（亥^い水^{すい}）と（子^ね水^{すい}）は水の十二支です。

そして（丑土）は、つぎに来る東方《春の領域》の3つの十二支
（寅^{とら}卯^う辰^{たつ}）との、ちょうど中間に位置しています。このように、
（丑土）は《冬》と《春》の調整役を担っているわけです。

（辰^{たつ}土^ど）は東方《春》の十二支ですが、つぎに来る南方《夏》の
十二支（巳^い午^ん未^み）との中間に位置しています。

この（辰土）も《春》と《夏》の調整役を担っています。

（亥）（子）という水性の十二支は（水^{すい}気^きの強い季節）か
ら、（寅）（卯）という木性の十二支（木^も気^きの強い季節）
へと移行する準備の“まとめ役”をしなければならない。
その役割を果たすのは、その季節が終わろうとする最後

の位置に存在すると考えたわけです。

その最後のところは、(丑) という土性であり、(辰) という土性になります。

夏から秋へ移行するのであれば (未) が調整役です。

秋から冬に移行するのであれば (戌) が調整役です。

そして、季節が移り変わろうとする最後のところでは、土性のチカラが特に強く発揮されるはずである。と結論づけました。

(亥子丑) という 3 つは冬の十二支です。ここでは (丑) が冬の土性です。

土性だけは（土用^{どよう}）ともいいます。

☞ 各季節における 1 番最後のところはすべて土用になります。

(亥子丑) 冬の十二支ですが、丑が土性です。丑の土用です。

(寅卯辰) 春の十二支ですが、辰が土性です。辰の土用です。

(巳午未) 夏の十二支ですが、未が土性です。未の土用です。

(申酉戌) 秋の十二支ですが、戌が土性です。戌の土用です。

このように、土用だけは、一年のなかに全部で四つあります。

⇒ 話が重複しますが——水の強い季節から木性の強い季節へ移るときの調節役をしなければならない時期は、その季節の最後のところだという捉え方をしています。季節の最後のところは、土性が特にチカラを強く発揮できるところであると位置づけています。

土というのは五行の中心であって、地面そのものです。春が来たら（土性）がなくなるわけではなくて、どの季節にも存在し、五行の中心的な役割を担うと意味があり、季節の最後はすべて土性の十二支としたわけです。

土用 ⇒ 季節間のまとめ役・調節役

☞ 土用の十二支がいくつもある宿命の人は「このような運勢になりますよ」「土用が1つもない人は、こういう運勢ですよ」というふうな占いにつながって行く^ゆわけです。

ご説明しましたように、十二支の五行（木火土金水）はすべて決まりました。

おぼえ方としては、夏は暑いから火が強い、冬は寒いから水が強い、春になると緑につつまれるから木性が強い、

秋になって、緑が失われるのは金性が強い、ほかはすべてが土用だと思っておけばよいでしょう。

前回勉強した十干^{じっかん}とおなじように、十二支もあらかじめ木火土金水をくっ付けた呼び方で覚えておくと、占いをするときにとても重宝^{ちようほう}です。

ただ単^{たん}に（子丑寅卯辰）とだけ覚えなくて、子丑寅卯に（木火土金水）の五行をくっ付けて、子は水性なので、子水（ねすい）というようにします。

丑は（うしど）、寅は（とらぼく）、卯は（うぼく）、このように、五行をつけた呼び方で覚えておくと役立ちます。

♪ 十二支は（子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥）ですが、五行をつけた呼び方で、すべて声に出して読んでください。

（子）五行は水性なので（ねすい）

（丑）五行は土性なので（うしど）

（寅）五行は木性なので（とらぼく）

（卯）五行は木性なので（うぼく）

（辰）五行は土性なので（たつど）

（巳）五行は火性なので（みび）

(午) 五行は火性なので (うまび)

(未) 五行は土性なので (ひつじど)

(申) 五行は金性なので (さるきん)

(酉) 五行は金性なので (とりきん)

(戌) 五行は土性なので (いぬど)

(亥) 五行は水性なので (いすい)

ぜひ、この呼び方で (十二支) も覚えて頂きたいのです。

【初年】 8 回目 【十二支と陰陽論】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 9 回目 【六十干支】